

## 「情動とは何か」解説

福田 正 治

この論文<sup>(1)</sup>は感情の研究において必ず議論される話題を持った仮説を提唱したものである。多くの人は、感情を考えるにあたって“悲しいから泣く、怖いから逃げる”と考えている。これは経験から、熊を見たときに、怖くなり逃げたという多くの人の発言から支持されている。しかし歴史的に眺めて見ると、単純にはそのように見られてこなかった。ここで紹介する W. James の“情動とは何か (What is an emotion?)”という論文において、彼は“泣くから悲しい、逃げるから怖い”という逆転の仮説を提唱している。

我々は、情動について、“ある事実の心的認識が情動と言われる心的感情を興奮させ、この心の状態が身体的表現を生じさせる”という、もう少し、“一般的に言えば、幸運を失ったときは悔しいし悲しい。また熊に遭ったときは怖くなり逃げる、敵に屈辱されたときは怒り攻撃する”と考えている。しかし James は情動を“身体的変化が興奮している事実の認識を直接伴い、これらが起こすと同じ変化の感じが情動である”と定義し、“ここで正当だと論じている仮説は、この一連の順序が間違っており、一つの心的状態は他の心的状態によって直接生じるのではなく、身体的表出がはじめにそれらの間隙に入ってきて、われわれが泣き叫ぶために悲しく、衝突するために怒り、震えるために怖くなるのがより合理的な説明で、悲しくなり、怒り、怖くなったために泣き叫び、衝突し、震えるわけでない”と逆転の仮説の提案をしている。これは経験的に“身体的変化がなければ・・・情動的暖かさが無い”ということに基づいている。同様に“私たちが何か強い情動を心に描き、意識から特徴的な身体的症状に関係した全ての感情を抜き出したとき、情動が構成している“心的要素”もなく、後には何も残らない知的認知の冷たくて中性的な状態だけが残っていることがわかる“とか”速い心拍動、深い呼吸、震えている唇、だりとした手足、鳥肌、内臓の動き、これら感じがないとしたら、どんな恐怖の情動が残っているだろうか“としばしば末梢の変化と情動の喚起について論じている。そして”身体のない人間の情動は非実在である“と述べる。生理学的に提起するならば、末梢の”特別な情動のいわゆる表示のどんな随意的な喚起も情動それ自体を生じさせるべきである“といういわゆる情動の末梢起源説にたどりつく。そして末梢の動作が情動を増幅していく”激しい怒りでは、繰り返される表示の暴発によって如何にクライマックスに向かって“興奮していくか”自明である“と指摘している。経験的に自明のようにも考えられるが、その証明は簡単でない。彼は最後に”たとえその理論が主張することが厳しく取られ、誤りだとされても、私の論文の出版は正当化されるであろう。私

が、そのために一番言えることは、論文を書く際、それが真実であることを自分自身に説得したということである“ということ述べているのは彼の謙虚さだろうか。

William James (1842-1910) はアメリカでの「最初のそして最大の独創的な心理学者」と称されている19世紀後半に活躍した人で、「自然科学としての心理学」を確立した人物である。Harvard 大学に、1872年に招かれ、最初、比較解剖学と生理学の講義を担当し、1876年、生理学助教授の昇任を機に、生理学的心理学を開講し、1890年「心理学原理」を出版した<sup>(2)</sup>。その間、ドイツでHelmholtzとW.Wundtに師事し神経系と感覚器官の研究を行っている。彼の伝記は今田の「心理学史」に詳しく記載されており、また心理学的位置づけについては「心理学史」に要約されている<sup>(3)</sup>。ここで強調したいことは、Jamesが大学で生理学と比較解剖学の講義を担当していたことである。当時の脳の生理学を理解した上で、情動の経験論を提唱したのである。当時の生理学では、この論文にも出てくるCharles Bell (1774-1842) が1807年に脊髄神経の前根は運動性、後根は感覚性線維から成り立つというBell-Magendieの法則を発表している。1823年にはBaron Cuvierが神経系統の分類、脳の大脳皮質の区分を提唱し、知覚、知能、意思の座があるとした。Johannes Muller (1801-1858) は1833年に「生理学提要」で生理学的知識の集大成し、脊髄反射、脳による反射を論じている。D.Ferrierは1876年にサルで視覚中枢が後頭葉にあることを発見し、Munkは1側の後頭葉損傷により半盲が起ることを発見している。Paul Broca (1824-1880) は左大脳皮質に発声言語中枢の発見し、1870年にG.FritschとE. Hitzigは犬の大脳皮質の電気刺激で運動が起ることから運動中枢の発見している。

1884年に発表されたこの論文で指摘している感覚中枢、運動中枢はこういうところまで進展していた。脳が認知、知覚、運動、感情に深く関連していることはよく知られていることであった。しかし当然のことながらその詳細に関しては不明であるが、脳が中心的であると誰もが考えていた。そこにJamesはあえて情動の考え方として末梢起源説を提唱したことになる。

感情に関する研究で、拙著<sup>(4)</sup>でも述べたように、Descartesの基本情念論から200年後の1884年に情動について一つの仮説を提唱したことの重大性は大いに指摘できる。しかし発表当初から批判が出てきたことは想像でき、またJames自身が論文で批判に対する説明に多くを割いていることから理解できる。

現在では、Jamesの仮説は感情の末梢起源説として多くの教科書で記載されているが、一種の誤った仮説として説明されることが多い。これはCannonによってこの仮説が徹底的に否定されたことによる<sup>(5)</sup>。Cannonは、脊髄損傷患者で、中枢神経と内臓が切断されている状態でも感情行動が起ること、人為的に自律系を変化させても感情が生じないことなどの理由を挙げて、Jamesの仮説を1931年ごろに葬り去った。と同時に、脳の研究が進み、脳の機能が明らかになるにつれて、学習、記憶、感情などの高次機能は脳で遂行されていることが確立されていく。現代の神経科学の進歩による「脳」万能主義によるところが大きい。

Jamesの仮説はここ100年間、常にその検証と反論が生理学、心理学から続けられ、現在も続けられている。Jamesの仮説を、一言で現代的意味に焼きなおすならば、「末梢の生理的喚起が、または生理的覚醒が情動を生じるか」という問題に帰着されると思われる。アドレナリンを末梢投与する実験やエフェドリンを経口投与し交感神経亢進による情動変化を調べた結果では不安などを増強した結果は得られたが新たな情動は生じなかった<sup>(6,7)</sup>。しかし表情に関して、表情の意識的操作が情動を誘発するという顔面フィードバック理論が最も研究されている<sup>(8)</sup>。顔という我々の情動に最も関係した末梢器官が感情の誘発に関係していることは興味ある。

Jamesの情動の末梢起源説は特定の現象を除いて否定的に捉えられているが、感情と身体との関係を論じる場合、その相互作用は避けて通れないことである。近年、感情を考察するにあたって身体の実在の重要性が指摘されている<sup>(9)</sup>。感情は脳だけで存在しうものかという身体と感情の問題を考察するに当たって、Jamesの詳細な理由を知る必要があった。何故経験に基づいた考えを発表しなければならなかったのか、その点を考えて見る必要がある。誤りの仮説であっても、現在、未だこの視点で感情を捉えようとする研究者がいることは、その中に一抹の真実が含まれていることを示唆しているのではなかろうか。要点は、「心理学原理」に記載されているが、原著を当たることによって彼の思想の一端を理解しようと考えた。しかし、彼の論文の内容を知人は非常に少なく、ここに慣れない翻訳を試みた。

## 文献

- 1) James, W. What is an emotion? *Mind*, 19, 188-205, 1884.
- 2) James, W. *The Principle of Psychology*, Cambridge: Harvard University Press. 1890/1983 (今田寛訳, 心理学, 岩波文庫, 1993)
- 3) 今田 恵. 心理学史. 岩波書店, 1962.
- 4) 福田正治. 感情を知る. ナカニシヤ出版, 2003.
- 5) Cannon, W.B. The James-Lange theory of emotions: A critical examination and an alternative theory. *American Journal of Psychology*, 39, 106-124, 1927.
- 6) Plutchik, R. and Ax, A.F. A critique of "Determinants of emotional state". *Psychophysiology*, 4, 79-82, 1967.
- 7) Cornelius, R.R. *The Science of Emotion*. Prentice-Hall, 1996 (齋藤 勇訳, 感情の科学, 誠信書房, 1999).
- 8) Buck, R. Nonverbal behavior and the theory of emotion: The facial feedback hypothesis. *J. of Personality and Social Psychology*, 38: 811-824, 1980.
- 9) Damasio, A.R. *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: Grosset/ Putnam, 1994 (田中三彦訳, 生存する脳. 講談社, 2000).

